「うぅ、ちょっと、何すれば、いいんですか……」
「あ○いちゃん可愛いのに凄いねぇ……
こんな大の大人でも大変な山に登るなんて……あぁ、可愛いなぁ」
「は、はぁ（き、気持ち悪いなぁ、あんまり近づかないでよぉ）」
「ほら、おじさんたちちょっと欲求不満でね。登山も好きだけど、夜は夜で楽しみたいんだ」
「よ、欲求不満って……？　わたし、何すればいいんですか」
「まあまあそんなに焦らないで、ほら、寒くて縮こまっちゃってるけど、可愛いから」
「か、可愛いって……な、なにを」

ジーッ……ぼろんっ
「！？　えっ、あ……」
「え、えっと、な、何……、何、出してるんですか！？」
「なにって、ナニだよナニ。あ○いちゃんにちょーっとだけこいつをいじくりまわして欲しいんだよね。そのお手手でさ」
「い、いやいや！！　無理です。無理です！　冗談はやめてください！」
「嫌ならいいんだけど、この寒空の中、お友達と一緒に出ていくかい？この天候じゃ、君らくらいの女の子なんて10分と耐えられないと思うけど」
「……で、でもあの、なんにもそのわからないというか、知らないというか」
「大丈夫。おじさんが優しく教えてあげるからさ。ほら、早く触ってみて……ほらほら」

「いっ！！　うあ……」
「うぉっ、冷たいなやっぱり、びっくりした」
「あっあっ、ちょっと！　び、びくんって、動いて……
気持ち悪い！　ちょっとべとべとしてますし」
「気持ちわりぃってひどいなー。おじさん傷ついちゃうなぁ、ほら、もっとこすってこすって」
「うぅ、嫌だよー。なんでわたしがこんなこと……はやく終わってよ……」
「あおいちゃん、で、出るよ、もう俺、出るからそのままっ……」
「出るっ、って、え、なんですか？　これ以上何するんですか……」

びゅ……ビュビュルッ
「きゃっ！　えっ、ひゃぁん！！」
「あぁぁっ！　いいよっ、あ○いちゃん、ほら、しっかり、受けとめてっ！！」
「いや、なにかこっちに飛んで、き、汚いよっ！　やめてください！」
「止めて……て、もう飛んじゃったもんはしょうがないでしょ。でもちょっと気持ちよかったよ」
「うぅ、べとべとしてる……嫌だぁ。もう、満足ですよね。か、開放してください」
「これで終わりなわけないだろ！？　なんもわかってないんだなぁ
あ○いちゃんは……ほら、もうちょっとだけ付き合ってもらうよ」
「うぅ……怖いよ。助けて……」

「（うう、わたしたち、登山にきただけなのに、なんでこんなことしないといけないのよう）」
「うう、気持ち悪いの、わたしに押し付けないでください……」
「よおし、しっかり脱いだね。なにされるかはもう、わかってるんだよね？ほら、おじさんも優しくするから、力抜いて」
「うう、怖いよぉ、みんなぁ、お母さん……」
「うん、やっぱりはじめてかな、ぴっちり閉じてるもんな。ん、くっ、よし、こうして、おっお……」
「あっ……う、ちょっとそんな強引に……い、いっっ」

ギチッ、ズブっヌププ
「うぐうぅぅ！！　い、痛いっいたいいたいぃ！！！」
「おー入ったぁ。さすがに全部は厳しいかな？
おじさんの結構大きい方なんだけど、うんうん、よくがんばった」
「あああぁぁ。い、痛い、な、何これぇ。
きついぃ、おなかの中きついぃ」
「やっぱりあ○いちゃん初めてだよねぇ。
おじさんのはちょっとハードル、高かったかな？」
「い、いいから、はや、はやく、抜いてください……」
「わかったわかった。ほら、もうちょっと待っててねぇ」
ジュプッジュプっ
「えっ、いやあの、はやく、まだ、まだ、なんですか」

どびゅっ、ビュルルル
「あっ、え？　い、嫌ぁ！！　熱い！　お腹に何か、入ってきて……嫌ぁ」
「おぉ、しぼりとられる……！　一生モノだなこの経験は。
処女におじさんの精液いっぱい流し込むなんてなぁ」
「せ、精液って、ちょっと！　やめて、抜いて！
に、妊娠、しちゃうじゃないですかぁ！！」
「うううう！！　ひ、ひどいよ……、絶対嫌です、そんなの……」
「思い出は多いほうがいいよね？
あ○いちゃん、それじゃもう少しだけ、がんばってみようか」
「うぅ、こ、これ以上、何を……」

「いいよぉ、あ○いちゃん、いい眺めだ。
山の頂上よりも、いい景色だよ～」

「うぅ、恥ずかしい……こんなの見て、何が楽しいんですか」

「いやぁ楽しいよ。普段キミたち女の子が頑なに隠している
ところをじっくり観察できるんだからね。そりゃあ楽しいさ」

「うぅ、変態、すぎるよこの人。
もう、いいですか。満足したでしょう？」

「なにいってんの？　これからあ○いちゃんのおしりを
おじさんのでキレイにしてあげるってのに」

「えっ、ちょっと何いって、え、何、何近づけてるのっ！
そこは、はいるワケないですっ」

「カタイこと言わずにほら、いっきに、いくよ」

ぎち……ズ、ズブブ、ヌプ

「あああぁぁぁぁ！　いっひっ！　ひぃっき、きついぃ」

「うあ、こ、こりゃ、おじさんのち○ぽが引きちぎられそうだよ……」

「あっあっ……ちょ、ぬい、ぬ、抜いて」

「ふ、ふぅう、もう爆発しそうだ……
もうちょっとだけおじさん、がんばるからね」

「あっあぁぁぁ、うぅぅう、おしり、裂けちゃうよぅ……！」

「よし、いっぱい注いであげるからねっ！！　いくぞっ！！　あ○いっ！」

ビュルルルル、ドビュルルル
「ぁ、ああーっ!! くううう! 熱い、あついぃぃ」
ビュルッビュルル
「……あーっ、気持ちいいぃ。止まらないぞぉこれ」
「ううぁぁあ、いやぁ、汚いよぉ。
うぐうぅう、お腹、気持ち悪いぃ……」
「汚いことなんてないだろ。元々そこは汚いところなんだからさ」
「うぅ、ひどいよ、なんで、こんな……」
「あ○いちゃんありがとう。よし、これから
おじさんと一緒に、カラダ暖めあって寝ような」
「……うっ、ひっく、い、嫌ぁ……もう嫌」

「うっ、うぶぅ、ぐぅぅ……ぶぅえ！　や、やめ……っ！！」
「おらっ、もっとしっかり舌動かさねぇか！！
しっかり掃除しろ！　嫌がってんじゃねぇ」
「ぅぅ、汚いし、ぐさいぃ！！　やめ、やめてよぅ！！
ひどいよ。おじさんたち、ふざけないでよぉ」
「うるせぇ、こちとら溜まってるんだ。
てめぇみてぇなメスガキで我慢してやるんだから、ありがたく思え」
「あ、あたしには関係な……うぶぅ」
「うぅっ、じゅぶ。うぐぅぅ」

じゅぷっジュプっれろ……

「よーしそうだ、いいぞ。やればできるじゃねぇか。
その反抗的な顔がなければもっといいんだがな」

「（うぅ、臭い、女の子の口にこんなの突っ込むなんて、
どうかしてるよ、絶対……）」

「おい、なんだ、言いたいことあるなら
言ってみろよ！　ボコられてえのか？　ああ？」

「！！　んっん、……うっ、んぅう、れる」

「最初から素直に言うこと聞いてりゃいいんだよ小娘が……」

「（うう、最悪……はやく、はなしてよぉ）」

「うっ、そろそろっ!! ひ○た、出すぞっ! しっかり飲めよ!」
「んぐ、んぅう、えっ……だ、出すって」
びゅびゅっ、ビュルルル
「んんんんっっ!! ん――!!」
「おらっ、口からはなすな!! 全部受け止めろ!」
「んぅ! ぶぅえっ!! ごほっげほっ、うぇえ」
「ちっ、全部飲めなかったか……まぁいい、ほら、カラダこっち向けろ、可愛がってやっから」
「うぅ……も、もう、嫌だよ、助けて」

「ひ〇たぁ、中々いい膣内してるじゃねぇか。
クソガキのわりには、悪くねぇぞ」
「うぅっ、き、きついぃ、あたし、はじめてなのに……
あんまり乱暴しないでよぉ」
「生意気いうなって。山ガールとかなんとか
言ったって、結局こんなふうに突っ込まれたがってんだろうが」
「……っっ！　んなワケ、ないでしょ。せっかくみんなとの思い出を、
こんな、ひどい、おじさんたちに……」
「ごちゃごちゃいってねぇでおら、濡らさねぇか……
男を喜ばせるくらいしてみせろっ」

ジュプッジュププッ
「うっ、うぅう、あたしのアソコ、痛い……痛いって」
「いいぞぉ、ちょっと、気持ちよくなってきたじゃねぇか……
学校でも、男のモノくわえこんできてたのか、おい？」
「ち、ちがっ！　あたしは、はじめてだよっ！！　それが、こんな……」
「へいへい、わかってるよ。お前のはじめては俺だからな。
しっかり記憶に刻み込んでやるからなっ」
「ひどい……この、オヤジ。はやく、抜いてよ……」
「わかったわかった、ピーピーうるさいガキだな。
もう終わるからもうちょっと待っとけ」

「えっ？　終わるんなら、は、早く抜い……」
ドビュルルルル、ドロぉ
「あああぁ！！　ちょっと、抜いて抜いてぇ！！
膣内で、ナカで出てるよぉっ！！！！」
「うーーっ、くっ！！　全部注ぎ込んでやるっ！　ひ○たっ」
「うぁあぁぁん！！　やめて、やめてぇぇぇ！　離して、離してぇぇぇ」
「はぁっ、はぁ……ふぅぅぅー。貧相なカラダでも
一人前に『女』してたじゃねぇか」
「ううぇぇ。最悪……信じらんない……ホント」
「おら、まだまだこんなもんじゃねぇ、夜は
長いんだ。まだ晴れねぇしな……よーし、暴れんなよ……」

「さ、寒いぃ……ちょっと、服ぐらい、返して、返してくださいぃ。お願いだから」
「今から暖めてやるから待ってろ。おま○こおっぴろげちまってまぁ……」
「!!　も、もう嫌ぁ。さっき出したでしょ。外してよ。これ外して……」
「お前みたいな生意気なガキはしっかり調教してやらねぇとな。山の厳しさを叩き込んでやる」
「や、山関係ないし……!　頭、おかしいんじゃないの」
「お仲間も楽しそうにしてるんだから……一緒に楽しもうぜ」

「ほら……よっと！！」
ニチャアァ　ニュルル、ヌプウゥッッ
「あぁ……あぁぁぁぁ！！」
「ううぅっ、おおおぅ！……おら！　もっとしっかり足絡ませねぇか！！」
「おなか、気持ち悪いいいっ！！」
「結構、こなれてきたじゃねぇか。これはこれで、いい感じだぞ」
「も、もうぅ、許してよー。はやく、抜いて、中には、出さないでぇ」
「うるせぇ、寒がってただろうが、俺の精液であっためてやるっつーの！」

「うぅっ！　やめ、やめてぇえええ」
ビュル、ビュルルル、ビュル
「あぁぁぁぁあ！　あぁぐ、くぅう」
「おぉぅ、そんなに咥え込むなって、心配しなくても全部注いでやっから」
「そんな心配、してないいいっ！！　抜いて、抜いてっ！　これも外してよぉっ！！」
「……ふぅう！　最初はこんなクソ生意気なガキあてられて
がっかりだったが、中々いい感じに発散できたな」
「夜は長いんだ。しばらくそのまんまでいろ。他のヤツが相手してくれるかもしんねぇからな」
「うぇぇえん、うぇえええ……もう、もぉお」

「……はっ、はぁっ」

「うん、もうちょっと強くしても大丈夫だから、しっかり、しっかり挟んで、ほら」

「ひどい、あなたたち……いい年して、私たちを、なんだと思ってるの……」

ヌルッヌルッぎゅうぅ

「あっ……ん、はあ、はぁ、くっ」

「まぁまぁ、小屋に入れてやってるんだから、その代わりとして少しくらい楽しませてくれても、いいでしょ」

「うっ……最低よ。下山したら、覚えてなさいよ……」

ヌチャッヌルッ……ヌラァ
「ひっ、ちょっ、き、汚いっ」
「知ってる？　これは男のカ○パーっていうんだよ。
か○でさんのおっぱいに垂れて、エッチだねぇ」
「ん、べたべたして、汚いっ！！　それに何この臭い……」
「これだけじゃ、もの足りないでしょ？　安心して、
もっとがっつり、ぶっかけてあげるから……」
「えっ、かけるって、まさか……その」
「やっぱり年長者なだけあって知ってるかな？　ほら、いくよ」

びゅっビュビュゥッ
「あっっ!! うあっ! い、いやっ」
「おっおっおっ! ふぅーっ」
「や、やめてっ!! か、顔に、かけないでぇっ」
「おーおー、ごめんごめん、ちょっと汚れちゃったねぇ。
でもやっぱりメガネってさ、こうやって汚すものだから」
「くっ、変態……もう、何が、何がしたいの……」
「いやー、やっぱおっぱい大きい娘は最高だなぁ。
キミとエッチなことできておじさん大満足だよぉ」
「……いつになったら、終わるの? もう……」

「いぎっ……ぁ、かはっ、きつっ……」
ヌチュッジュブッジュブ
「ふぁっ、あああぁ！　もうちょっと、ゆ、ゆっくり、お、おねが……」
「か○でさん、いいねぇ。やっぱ下から見ると、魅力的だよぉ。おじさんの上に乗っかっちゃってさぁ」
「あなたが、乗せたんでしょ……くふぅっ！」
「おっぱいぶるんぶるん揺らしちゃってまぁ……あー、気持ちいいなぁ……」
「ふぅぅぅ！　くっ、ぅぅぅ。私、はじめて、なのに、こんな……」

「くぅっ、うく……てください」
「ん？　何、なんて？」
「私が、がん、がんばるから、みんなには、何も、しないでくださいっ」
「え……俺の仲間ももうお楽しみ中みたいだし……そんな今さら」
「今からでも！！　もうみんなに乱暴、しないで……止めてあげてっ」
「か○でさん一人で男4人を相手に？　ちょっと厳しいんじゃないかな？
まぁ実際みんなはか○でさん狙ってたみたいだけどねぇ」
じゅぷっジュプジュプ
「いいおっぱいしてるし、なんかS○X気持ちよさそうなカラダ
してるもんなぁ。ほら、おじさんもう限界。おしゃべりはいいからっ」

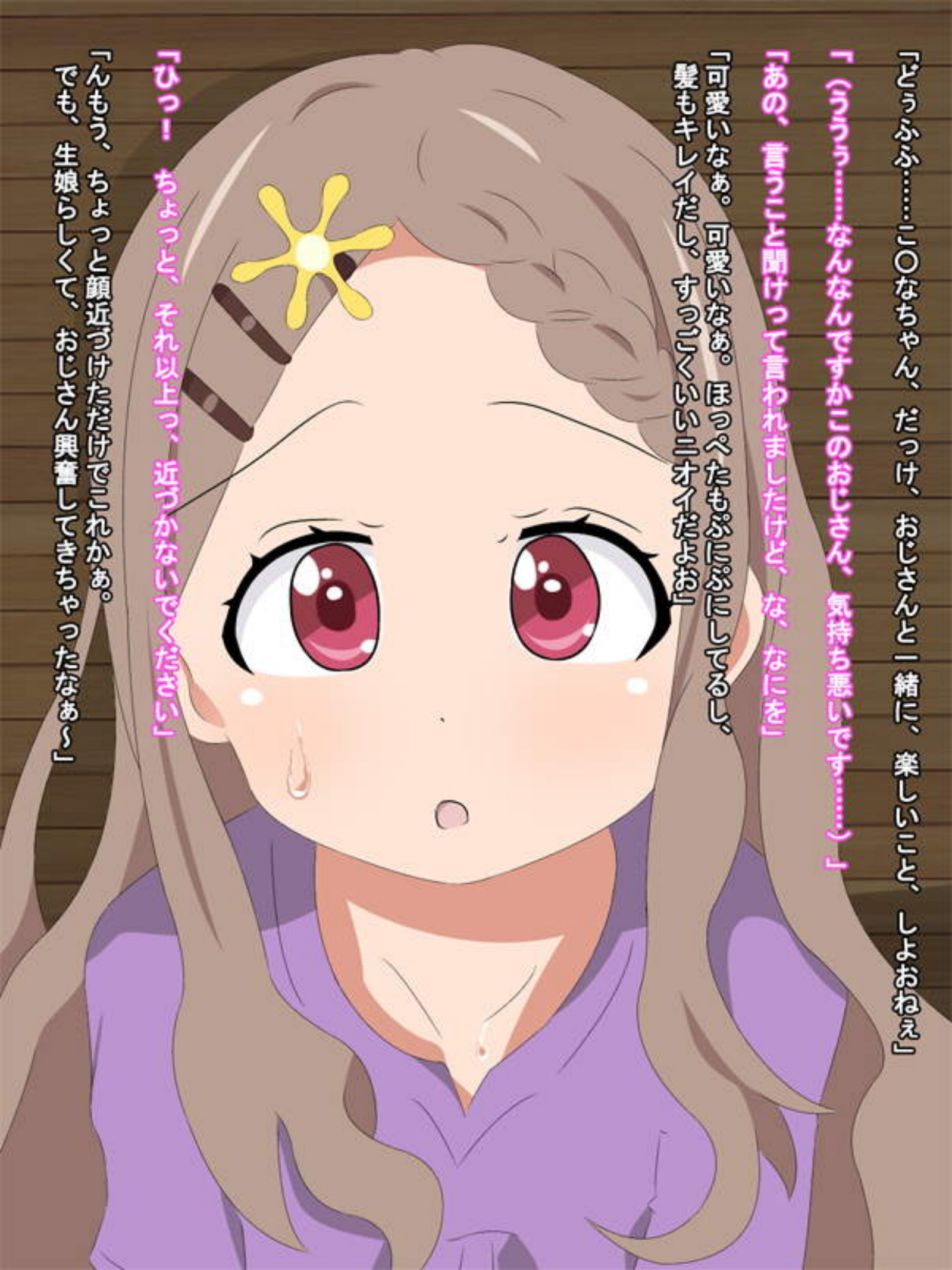
ビュ、ビュビュビュルル、ドロォ
「っっっ！！　あ――――！　あぁ！　かっ……っ、突き上げられてっ！　うぅぅぅ！」
「か○でさぁん！　しっかり、子宮の奥に、注ぐから、妊娠するんだぞっ！　おっ、おっ、おおぅぅう」
「うっうっ、膣内に、出さないで、ほしかったのにぃ……やめて、ほしかったのに」
「ふ――っ、ふぅぅ！　ちょっと、疲れたかな、休憩～」
「は、早く、抜いてください。もう、いいでしょ？　みんなも、休ませてあげてください……」

「だーめ、こういうのは余韻が大事なんだから、
処女だったか○でさんは知らないかもしれないけどねぇ」
「だって、はやく、抜かないと、抜かないと!! 妊娠、妊娠しちゃう! は、はなしてよっ」
「おじさんの子供を身ごもってから、一緒に仲良く下山しようよ」
「もうっ……もおぉ、最低、いい加減に、してください……」
「か○でさんのお仲間もみ~んな楽しそうにしてるんだから、
おじさんとの思い出も、まだまだこれからだよ」
「あたし、こんなおじさんとの子供なんて、欲しくない……絶対欲しく、ないよ……」
「しっかり、あったまろうね。下手すると、死んじゃうからね、山は」

「あぐっ、えぐ……うぅう」
「か○でさーん、あったかいねぇ。気持ちいいねぇ」
「っ、こんなの、い、痛くて、気持ち悪い、だけ」
「うーん、じゃぁこう考えようよ。今外が吹雪いてて、このままじゃ凍死しちゃうから、愛しい人とカラダを暖めあってるってさ」
「ど、どこに、愛しい人が、いるの……ただの頭のおかしい、おじさんばっかり、じゃないっ」
「失礼な言い方だなぁ。そんな反抗的なか○でさんには、お仕置きだぞ」
「えぅっ、うくっ!! そんな、後ろから、お、押し付けて……」

びゅるん、ドビュルルル
「えっうぇ……また、なか、膣内にいい」
「こりゃもう、まじもんの妊娠確定だなぁ。おめでとう。か○でさん」
「うううぅっ！　き、きたないい。うう、みんな、ゴメンね、私が、助けてあげないと、いけなかったのに……」
「あらら、年長者だってのに弱気だなぁ。最初見たときはちょっとキリっとしてたのにねぇ」
「（なにが、いけなかったんだろ……こんな山小屋にこなければ、こんなことには、でも）」
「ふぅぅ、よし、もう出ないな。おじさんの精液カラッカラになるまで注いであげたからね」

ヌポッ……ヌチャァア
「んっ……んぁっ！」
「おおぅ、俺こんなに出したのか……か○でさんのおま○こから、すっごくあふれてくるよ」
「……」
「おしりぷるぷる震わせちゃってまあ。また勃起してきちゃうじゃないか」
「……うぐ、もう、勝手に、してよ」
「言われなくても、山を降りるころにはち○ぽ狂いのクソビ○チにしてあげるから、覚悟しててよね」
「こんなことになるのなら、や、山で、死んじゃったほうが、よかったよ。本当ごめんね……みんな……ぁ」

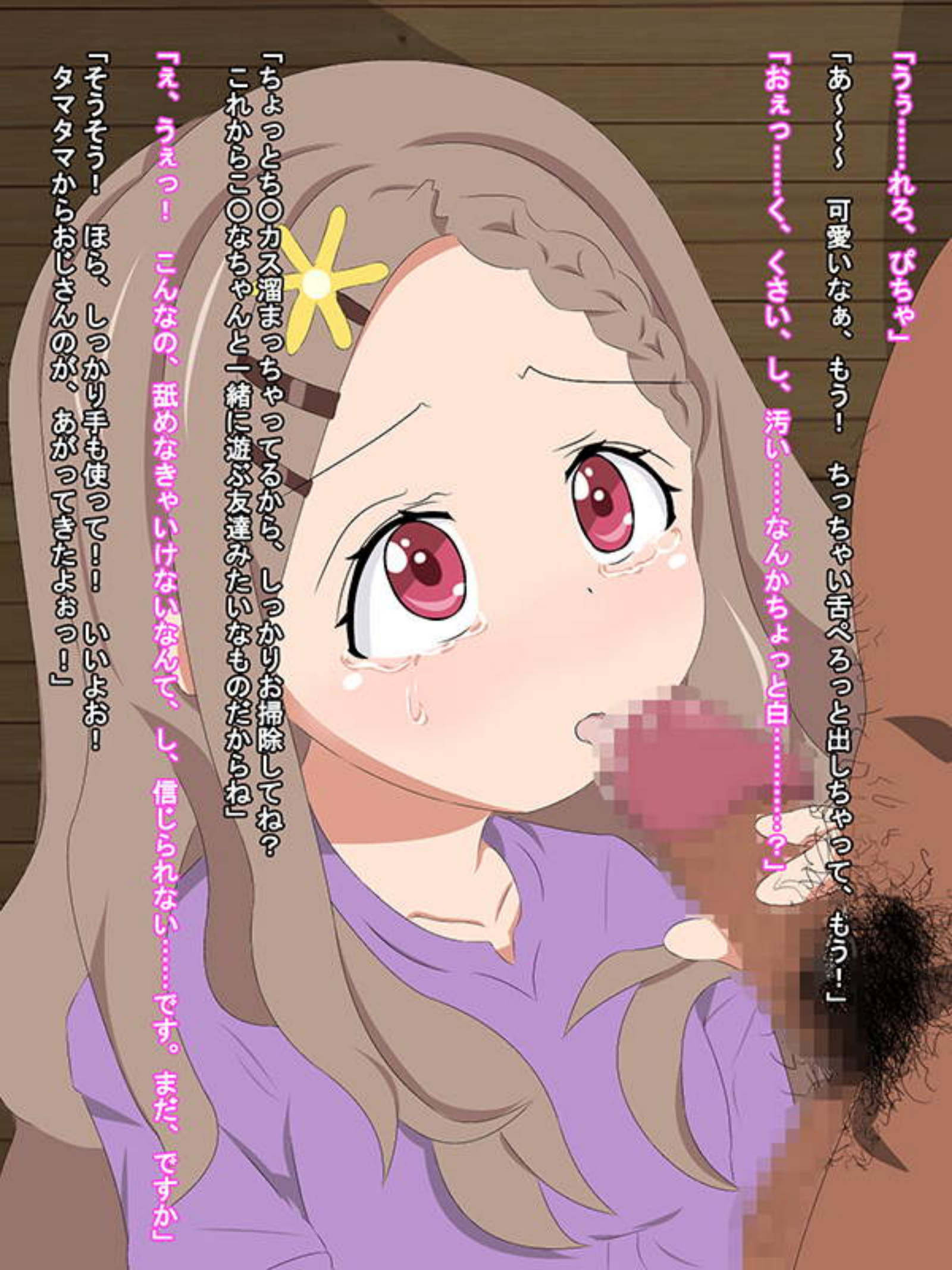

「どぅふふ……こ〇なちゃん、だっけ、おじさんと一緒に、楽しいこと、しよおねぇ」
「（うううぅ……なんなんですかこのおじさん、気持ち悪いです……）」
「あの、言うこと聞けって言われましたけど、な、なにを」
「可愛いなぁ。可愛いなぁ。ほっぺたもぷにぷにしてるし、髪もキレイだし、すっごくいいニオイだよお」
「ひっ！　ちょっと、それ以上っ、近づかないでください」
「んもう、ちょっと顔近づけただけでこれかぁ。でも、生娘らしくて、おじさん興奮してきちゃったなぁ～」

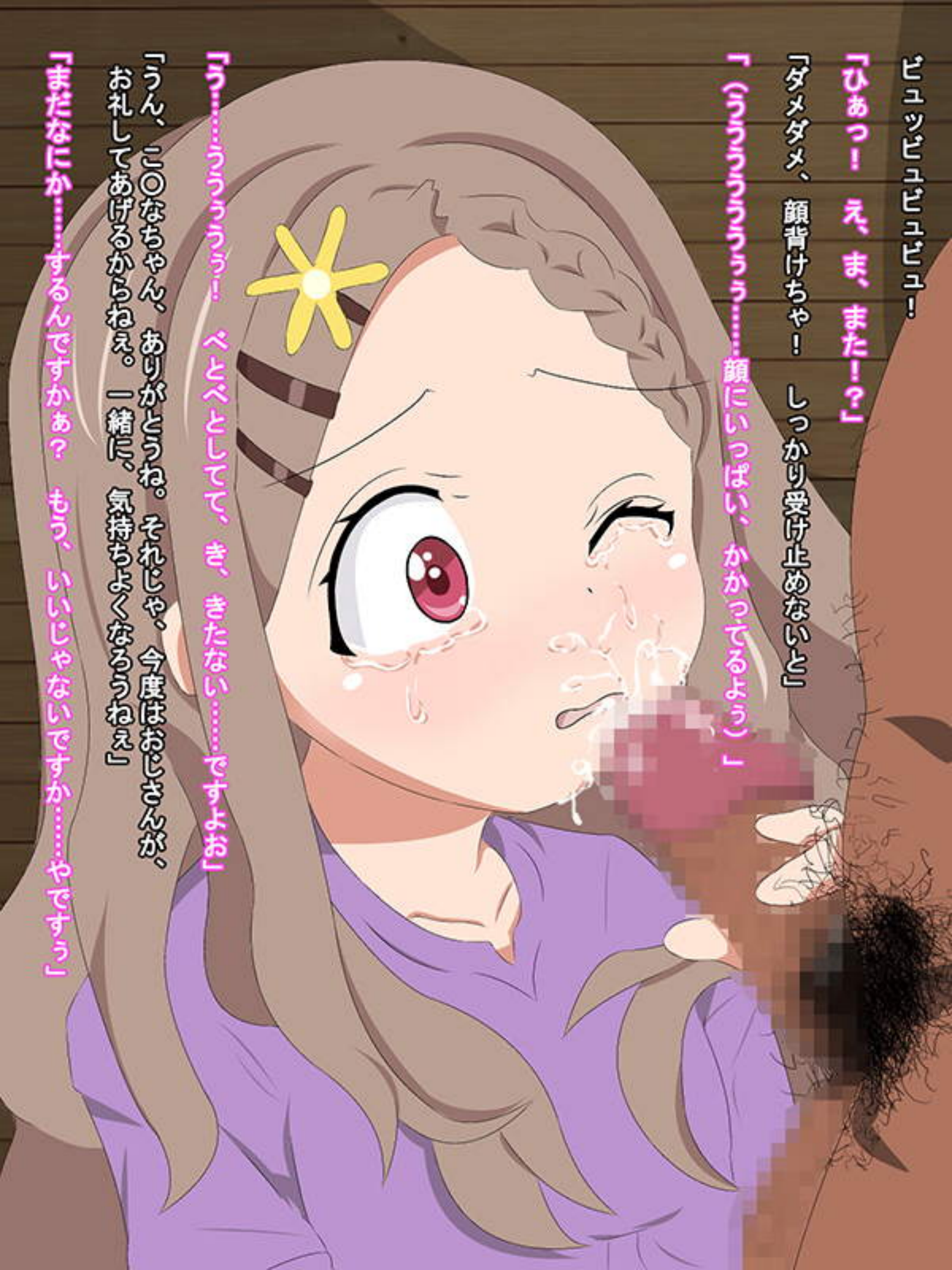
びとっ、ニュルウ
「え……これって？　いっ！！　ひっ！　イヤァ！！」
「んほぉ！　いい反応だよぉ。おじさんのおち○ちんもびくんびくんしちゃうなぁ～」
「えっえっえっ！！　な、なにこれ、なにこれぇ」
「やっぱロリーなこ○なちゃんは知らないかぁ」
「はやく、はなしてっ！　しまってくださいぃ」
「え～、おじさんすっごく楽しいのにぃ。一緒に楽しもうよぉ。ね……ね！」
「（うぅ、強く、押し付けられて、何、なんなんですかぁこの人）」

「うっうぇ、変な、におい……」
「そんなこと言わないでよぉ。んふふ。こ〇なちゃんのほっぺも、おんなし匂いになるんだからね」
「ひっ、いや、いやです。……えっ、これは？　なにか、べたべたして」
「あ、おじさんの我慢汁だねぇ。おち〇ちんが我慢できなくなると、だんだん出てくるんだよぉ。しっかりお勉強してね」
「ううぇえほっぺから流れてくる……なんですかこれぇ」
ピトッニュルンッニュルン
「よし、こ〇なちゃんっ！　ちょっと面白いもの、見せてあげるからねっ」

ビチッビュルルッビチチッ
「ひゃあ！　えっえっ！　ちょっと、やめて！　くださいっ！！」
「おおう！　おうふ！　んん、いいよぉ、あぁ」
「や！　やん！　何コレ……なんですかこの、白いの」
「（うぇ、なんか、嗅いだことのないニオイ……すっごくべとべとしてて、変な感じ）」
「それはおじさんの精液っていってね。赤ちゃんを作るために必要な液体なんだよお」
「えっ、赤ちゃんって、これが……」
「よし、じゃ、こ〇なちゃん、もうちょっと勉強してみようか、味を、教えてあげるからさ」

「えっと、う、嘘ですよね。こ、これを、私が、舐めるんですか……？」
「うんうん！　飲み込みがはやくてえらいぞ？　女の子なら必ずやる儀式みたいなものだからね」
「い、いやです……！　こんな、男の人の、汚いところを、その、な、舐めるなんて……」
「ごちゃごちゃ言わない。ほらぁ、こ○なちゃんのせいで、
僕のおち○ちんバッキバキなんだからさ、ほら、ほらほら」
「うぅ……こわいよ……汚いよ……みなさんも、こんなの舐めたりしてるんでしょうか……」
「そりゃそうだよ。彼女たちは年上だろ？　ほら、みんなに追いつけるように、頑張って」


「うう……れろ、ぴちゃ」
「あ～～～　可愛いなぁ、もう！　ちっちゃい舌ぺろっと出しちゃって、もう！」
「おぇっ……く、くさい、し、汚い……なんかちょっと白……？」
「ちょっとち○カス溜まっちゃってるから、しっかりお掃除してね？
これからこ○なちゃんと一緒に遊ぶ友達みたいなものだからね」
「え、うぇっ！　こんなの、舐めなきゃいけないなんて、し、信じられない……です。まだ、ですか」
「そうそう！　ほら、しっかり手も使って！！　いいよお！
タマタマからおじさんのが、あがってきたよぉっ！」


ビュッビュビュビュ！
「ひぁっ！　え、ま、また！？」
「ダメダメ、顔背けちゃ！　しっかり受け止めないと」
「（うううううぅぅ……顔にいっぱい、かかってるよぅ）」
「う……うううぅ！　べとべとしてて、き、きたない……ですよぉ」
「うん、こ○なちゃん、ありがとうね。それじゃ、今度はおじさんが、お礼してあげるからねぇ。一緒に、気持ちよくなろうねぇ」
「まだなにか……するんですかぁ？　もう、いいじゃないですか……やですぅ」

「こ○なちゃん、可愛いよぉ。ツルンってしたカラダ、すっごく魅力的だよぉ」

「背中、冷たいです……お洋服、返してください」

「おじさんがお洋服の代わりしてあげるから、だーめ。こ○なちゃんがぺろぺろしてくれたおち○ちんが、あったためてくれるからねぇ」

「えっ、何、まだなにかするんですか……もう私、疲れて……」

「あら～、ここなちゃんさっきまでのショックでぼーっとしてるねぇ。まぁ、すっごく目が覚めることしてあげるから、待っててね」

「（もう、疲れちゃった……はやく、おわらせて）」

ズンっ！　ギチチ

「あぎっ！！　えっえっ！　い、痛い痛いいっ！
な、なに、なにするのぉ？」

「あれ、こ○なちゃんやっぱりちっちゃいなぁ。
やっぱちょっと早かったかなぁ。えへへへ」

ギチチチ、ずぶ、ずぶぶ

「ひっひっ……！　か、はぁっ……痛い、本当に、痛いんです」

「あっあがっが……く、くううっ！　っは、やめ、やめて」

「……ふうううっ！　こんなもんかな、じゃ、動くよ？」

ヌプッヌプッヌププ
「あっあっあっあっ！　何、なにこれ……？
おなかの奥に、きてますぅっ！」
「こ○なちゃん……こ○なちゃん、ちっちゃくて、可愛いよ。
おま○こキツキツだけど、気持ちいいよぉっ。
こ○なちゃんも、ちょっと気持ちいいでしょ？」
「そんなこと、お、思って、ませんっ！！
こんなおじさん、気持ち悪い、だけです」
「あ、言ったなぁ？　ドウフ、おじさん、許さないぞぉ」

「えっ、許さないって、え、何を」
「こ○な、しっかり、受け止めろぉっ！　孕めぇぇ」
ぴゅ、ビュルッ……ぴゅっ、ぴゅるるる
「あうっふぁあああ！！　出てるぅっ！　さっきの熱いのが、いっぱい出てますううぅ！！」
「んふうぅぅー、これで、これでぇ、こ○なちゃんのおなかの中に、おじさんの赤ちゃんが、できたからね。よろしくねぇ」
「嫌、いやいやいや、赤ちゃん嫌です、抜いて抜いて抜いてぇ……！！」
「まぁ待った待った。最後までし～っかり、注いでからね。ああーっ、くっ。狭すぎて搾り取られちゃうよ」

ニュル、ツプププ、ッポン
「あ～、たまらん～、きほちょかったぁぁぁ」
「うっ、ひっく、ひっく、私の、大事なところが……熱い、熱いの……きたないよぉ」
「こ～んなちっちゃい娘のおま○この中から精液があふれてるなんて……忘れずに写真に収めとかなくちゃね……」
ジ――ッカシャッカシャ
「風景なんかよりすっごくいい写真がとれたぞぉ。こ○なちゃん。ありがとお」
「うっ、うっ、うううう」
「まだ外は吹雪か……もう2、3日、一緒にいられるかも、しれないね」
「……誰か、たすけて、くださ、い」